

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第135号・平成12年12月1日

十表で読む、

古平の歴史

《42》

■鮭漁の許可

明治八年、古平川での鮭の引網が三人に許可されていて、その後、山本春松が引網、仲谷半次郎が河口での銚（もり）による漁を願ひ出しましたが、いずれも許可されませんでした。

銚漁は河口をふさぐので、鮭の絶滅につながるというのがその理由でした。

明治九年には鮭を保護する立場から、川を横断して網を張る鮭漁が禁止になりました。

古平外二郡の事務引継書に次のような条項があります。

「一、鮭漁業注意 鮭漁業ハ繁殖上ノ問題カラ、郡内スベテノ川デコレヲ禁止スル。役人ガ巡視シテ監視スルコトニナツテ

イルガ、ソレデモ密猟ガ横行シテイル。サラニイツソウ厳重ナ取り締マリが必要デアル。」
それでも鮭の密猟は跡を絶たなかったようです。

■刺網による鮭漁

鮭の刺網はいづころから始まったのかは分かりませんが、明治八年には七六人に許可されていました。

年 度 人 数 税 額

明治一五年 二七人 一四五〇銭

明治一六年 二七人 一四五〇銭

明治一七年 一六人 一四五〇銭

明治一八年 二六人 一四五〇銭

磯舟を使つていて、網数には制限があつたようです。一年ごとの許可で、漁が終わると鑑札を返納していました。

■鮭の建網

建網もいつごろ許可になったのかは不明ですが、入船町・仲谷清吉の許可願ひがあります。

鮭建網之儀奉願上候

去ル明治九年カラ鮭建網ノオ許シヲイタダイテ漁業ヲイタシテヲリ、有リ難ク思ツテヲリマス。ツキマシテハ本年モ同様ニ十月一日カラ古平郡垂美村（現在の港町）事代社（厳島神社）ノ沖ヘ網ヲ建テタイト思ツテヲリマス。ナオ税ニツキマシテハ今マデ通り現品デ収メ、改正ニ従ヒオ収メイタシマスノデ、願ヒノ通り仰セ付ケ下サイマスヨウ願ヒ上ゲ奉リマス。 以上

明治十一年九月二十日

古平郡入船町二十三番地

仲谷清吉 ㊤

同 郡 同町十九番地

藤枝米吉 ㊤

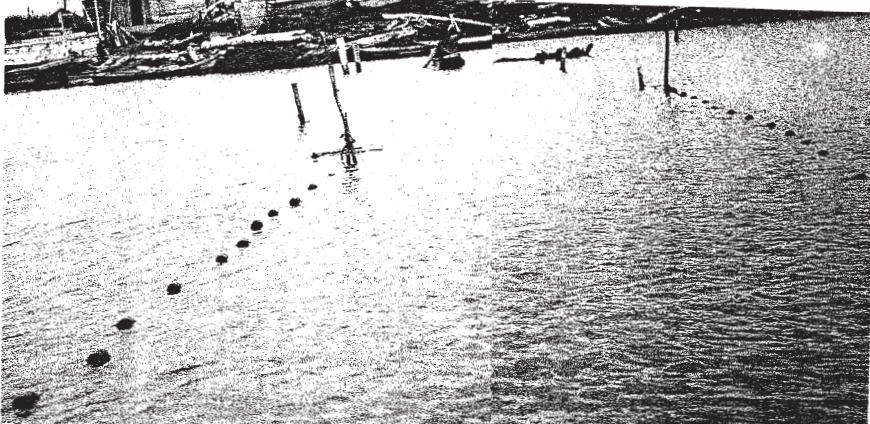
惣 代 幾井舊七 ㊤

鮭網の許可は一年ごとでしたから、許可願ひは毎年出さなければなりません。税は現品で収め税額は、漁獲高が五十石はあるものとして、二割の十石は必ず収めなければなりません。

んでした。

税として納入された鮭は願ひ人に払い下げられますが、役所の決めた価格で買わなければなりません。

ハ川に仕掛けられた鮭網V



大正七年

3/12 ⑥歩方では網下ろし、旗を立てて景気がよい、学校では雪合戦があるというので子供を連れて見に行ったが、実に勇ましいことであつた。

3/14 町は鯨漁の準備でどこも忙しい、店もボイル油、アバ縄、網などで忙しい、刺網も終わるかと思つていたが方々から客が来る、出足平（現在の白岩町）から来たという人は、家の余市、小樽辺の品物より良いと、来年も頼むと言つて帰つた、本陣の浜へ、網が着いたかどうか見に行ったが、子供たちが海草取りをしている。

3/15 カレ網大漁、余市通いの船が二隻、競争しながらやつて来る、⑦で建網を建てたが今年第一番である。

3/17 小樽新聞によれば古平沖四マイルで、調査船の探海丸が鯨千尾ほどとつたと出ている。

3/18 新聞によれば、十六日夜、余市で初鯨、湯内でも五〇六モッコの初鯨がとれたと

いう。

3/22 昨夜、時化の中、入船町で刺網を刺したところがあり、千尾ほどとつたという。

3/25 初鯨が三百石ぐらゐとれた、刺網だけの漁だが町中、一般に行き渡る、二十軒余りから鯨を貰う。

4/1 小学校の入学式、幸治を連れて七時半までに学校へ行く、裁縫室で身体検査や子供の氣質などを聞かれる、十時

から入学式、担任は長谷川先生という女の先生だった。

高野名幸作さんの日記から



【36】

4/2 〇で二杯とり、この日第一であつた、あとのところは二〇三モッコ、このところ諸物価が暴騰している。

4/5 昨晚の模様から、今朝は漁があるかと思つたが薄漁で、せいぜい一〇二杯でモッコしよいもない。

4/7 ㊦などで十杯ほ

どとる、刺網は昨晚は時化模様だったので、大部分は引き揚げたが刺した人は大当たりであつた。積丹は中漁。

4/11 歌棄山中で、△十五〇六杯、建網五、六か所で四〇五杯ずつとつた、歩方はなし、㊦一杯半、西村四杯、田岸五、六杯、本陣歩方三杯、入舟町から丸山岬まで七〇八杯、介から本陣にかけて十五〇六杯、今日だけで四千石、累計で

九千石になる。

4/12 崎長、神田などでは十五〇六杯、刺網は皆無であつた。

4/14 ㊦漁場で四〇五杯とれたほかは漁は無し、小樽新聞では、この日までの古平の漁は一萬石とある。

4/17 鯨漁は前浜の本陣歩方、田岸、㊦などが七杯ぐらゐ、伊之君△へ行って三モッコ

貰つて来る。

4/18 前浜がよく、歌棄山中は薄漁、刺網は鯨が小さくなり、網を抜けるのでかからなくなつたとのこと、農園へ行つた父と伊之君が、帰りにヤマベをすくつて来て喜んでゐる。

4/20 今日から東京行き

5/24 佐渡稲鯨出身だといふ浪花節語り、桃中軒東雲といふ人が来る、古平座で木村重好一座と興業すること、同郷人が多いので、大いに人気も高まるだろう。

5/26 招待券を貰う、今晚から新地古盛座であるといふので、これは聞きに行かねばなるまい。入舟町㊦さんと、分吉田の農園を買うとのこと、主人が指図して庭園をこしらえてゐる。

6/3 鯨場の漁夫も全部帰り、浜がさみしくなつた、町内では運動会だ、芝居だ、売り出したと景気が良い、夕方、店がひまになつたので農園へ行つて見たが、リングの花が大分咲いている。

（次号へ続く）

北海道・樺太・千島を探険

最上徳内

蝦夷草紙

7

を読んでみましょう

鯡(にしん)を祈る

私が蝦夷地の帰り、疲れて荒谷村の砂浜に足を投げ出して休み、その村人たちから話を聞いたことがあります。

十年前ころまでは鯡もたくさん漁があり、松前周辺ではこれほどの漁のある所は外に無いほどで、生活も安穩でした。その後、一向に漁が無くなり、生活も困窮するようになりました。

鯡漁が本業なので、松前辺りから金を借りている者はまた借金をして仕込みをしたが、待てど暮らせど鯡漁は皆無で、損失ばかりが増えていきました。

ところが昨年(前年二六)のことです。南部・佐井村から大聖院という山伏が来て、鯡大漁の祈願をしました。地藏堂の山の奥にこもって木喰(もくじき)穀

物を食べないで、木の実などを食べて修業する)をし、十七日間も断食しながら、裸足で弁天堂と城内の稲荷に日参したので

す。そして、今年は鯡が大漁だという神のお告げがあったと言

いふらしたので、高利の金を借り、網を繕い、舟や道具を整えて鯡を待ったが鯡は一匹も獲れず、北よ南よと舟を漕ぎ出して

いるうちに漁期も過ぎ、生活はますます難渋するようになりました。せめて四、五日でも漁があれば

ば少しでも蓄えができ、心も安まるものを——この苦しみからどうして逃れたらいいものか、毎日、思案ばかりしているところ



この本が書かれたころの西蝦夷地場所(松前藩の領地)

ない。私は、耕作の技術がまだ及んでいないことを非常に残念に思っています。

塩かまどの無いこと

松前は干魚・塩魚を特産とする土地なので、特別に塩を大量に使うところです。塩は播州竹原産・赤穂産のものを多く使っていますが、藩内で塩を作ることを願い出ても藩ではこれを許可しません。

蝦夷地や周辺の島には雑木が一面に生い茂り、倒れた木もそのままでは腐ってしまいます。それで、豊富にある木を利用し

て塩焼き(製塩)をすれば、藩の利益にもなり、また産業として住民の生活にも役立つでしょう。今まで塩を積んで来た船も、塩の代わりに外の品物を積んで来れるはずで、塩の代金として他国へ払う金も藩内に残り、アイヌの生活にも役立つものであると思われます。

松前では、「土地で塩を焼くと、松前鎮守である弁天様の神慮にそむく」などという俗説があるので、塩焼きをする者がいないのだと考え、これは残念なことだと言わしめられます。

——続く——

たらつり節と 古平のたら漁

古平で生まれた民謡『たらつり節』は、北海道の五大民謡の一つとして広く知られるようになり、多くの人に愛好されうたわれています。今年で11回を数え、古平町の一大イベントでもある『たらつり節全国大会』も年々関心が高まり、出場者も180人を超える盛況ぶりです。

このたび、たらつり節の作詞・作曲をされた大島豊吉さんと田村栄蔵さんのご遺族から、古平町がその著作権を譲り受け、文化庁に権利を登録申請することになりました。これで名実共に古平町のたらつり節となるわけです。

このたらつり節に關係して、古くから行われ、多くの漁民の生活を支えてきたたら漁について冊子にまとめています。それで、後編になる『古平のたら漁』から、順次、紹介していきたいと考えております。

▼たらというのはどんな魚

日本は海に囲まれていて、昔から水産資源は豊富でしたし、また、それらの多くは全国各地に流通していました。それで魚の呼び名も、産地や地方によっていろいろあるようです。しかし、たらはどこでもたらで通っ

ていますが、古平というスケソ（スケトウダラ）は、所によつてはたらというそうです。

たらというのは、一般にたら類の総称で、学問上の分け方であるたら科にはマダラ・スケトウダラ・コマイの三種類があります。野菜のナス・トマト・ト

ウガラシなどをまとめてナス科というのと同じです。

その中でたらと呼ばれるのは、いうまでもなくマダラのことで、たらの仲間では最も大きく、深海の底に棲んでいることが多く、体長が1メートル余りにもなるものがあり、美味だということでも世界中で好まれている人氣ものです。

若いころ、たら釣りの体験もあるという松田清さんは、「以前だと、一人で船倉から甲板に揚げられないぐらい大きいたらが釣れた。」と言います。

スケソもたらによく似ているので、よく知らない人はたらの子どもぐらいに思っています。

コマイはぐつと小さいので、さすがにたらとは言いません。本道東部の汽水湖の水の下から獲れることで有名です。

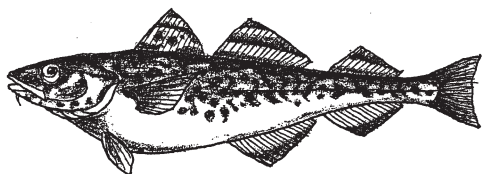
▼マダラという名前

世界的に見てたら漁はニシン・イワシに次ぐ大きな漁業で、ヨーロッパの国の人たちの大好物で、たら漁が原因で戦争にかりかけたことがあります。

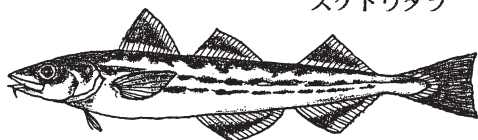
一般の呼び名はたらですが、標準和名はマダラで、タイのようになまの字がついて「真鱈」かと思うとそうではなく、実は体に「斑（まだら）」が目立つのでそう呼ばれるようになった、という説もあります。

寒流に棲み、食欲、生活力共に旺盛で、手当たり次第何でも食べるので、腹いっぱい食べることを「鰯腹」と言います。

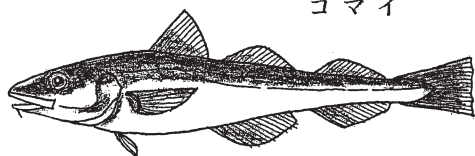
マダラ
背びれ3枚、しりびれ2枚、ひげ1本



スケトウダラ



コマイ



昔の結婚式のこと

竹 内 コ ト

私たちが子供のころは、近所で誰かがお嫁さんでももらうという、好奇心から何かと大きな話題になります。

一方、お嫁さんをもろう家では大忙しです。ご馳走の準備から始まって、当日になると、家中の建具を全部取りはずして広くし会場づくりです。床の間には縁起物の鶴亀や松竹梅の掛け

軸を掛け、結納品や三三九度の盃(さき)などが並び、松飾りなどもあったように思います。

床の間を背に座った新郎は、隣に座る新婦を待ちます。二人が揃うと、小さな男の子と女の子が前に進んで、二人に三三九度の酒を注ぎます。

固めの盃がすみ、両家からあります。宴が盛んになると唄や

踊りで賑やかになりますが、ドジョウ・すくい・人気があったようです。家の周りや土間にまで見物の人が集まって来ますが、それらの人にお菓子などを上げる家もあったようです。またそれが楽しみで、子どもたちなどは早くから集まっていました。

披露宴は新郎の家で招待し、新婦の方の家族をとっても大事にしていきましたし、親戚の人たちも互いに打ち解け合って、喜びを共にしていました。今の結婚式とは違っていたようです。

昔の人は嫁さんを宝物と言ったように、その宝物が来るので

すから、これほどうれしいことはなかったようです。

披露宴は夜中まで続きます。招待する方では、ずうっと居てくれることを相手の誠意と思っていますし、客の方もそれが義理だと思っています。もちろん見物人は早々に帰りますが、客が一人、二人と帰って、誰も居なくなつたときが披露宴のお開きというわけです。

今でも当時の結婚式——昔は『嫁取り』と言っていました。が、なぜかときどき思い出すことがあります。

仏像探訪

室 谷 忠 雄

仏陀(ぶつだ)の相には、三十二相八十種の相(正式には三十二相八十随好形)があると言

のは、仏陀は超人的な人格をもち、この人格を持つ肉体的な条件を「大丈夫」といい、これら

われています。

これは仏教用語で「大丈夫」といいます。「大丈夫」という

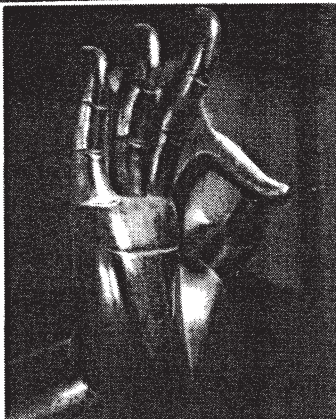
が示されているいろいろな経典があります。

涅槃教(ねはんきょう)・無量義教(むりやうぎきょう)

△千輻輪のある薬師如来の足▽



△みずかきのある縹網の相▽
㊦(次ページ3段目へ続く)



遙かなる故郷の思い出

わが闘病日記

[72]

橘 義 春

癌(ガン) — 続き —

7月27日(月)

お昼頃、主治医の桂先生が来室、私の手術に関して明日の夕刻、跡見教授から説明があるので、私の家内にも立ち会ってほしいとの要請があり、早速、家内へ電話を入れる。

7月28日(火)

家内が午後4時頃来院する。夕方予定の跡見教授の手術説明会が先生の仕事の都合で大分遅れ、始まったのは夜の9時頃であった。

先生のお話では、大腸を20センチぐらい切除するらしい。大腸を縫い合わせるのは技術を要する仕事なので、もし縫い合わせた場所に異状が起きたら大変ことになるので、手術後の食事

と水は、主治医から許可があるまで禁止、手術に要する時間は3時間間の予定。輸血は出来る限りやらないようにする。以上で、跡見教授の説明会は終わった。

7月30日(木)

午前、入院して初めて風呂へ入る。家内に体を洗ってもらい、いい気分だ。

これで、いつやつてもらってもいいように手術の準備はできた。ふーッと脳裏をかすめたのは、大腸ガンで入院手術して、最後まで集中治療室から出ることなく、黄泉の旅路をそのまま逝ってしまった函館の兄のことだった。

ひよっとしたらこの俺も、これで最後かも——と、悪い予感が頭をもたげてきた。こんな時

(前ページより続く)

りよききよ・智度論(ちどろん)などですが、これらの教典の中に示されている「大丈夫」に当てはまらないものは仏相とは言いません。ちなみにその一部を紹介してみます。

三道といって、首に三筋のすじがあること。

眉間に白毫があること。

螺髪であること。

頭の頂上の肉が隆起していて、日本の鏡餅状になっていること。

耳たぶが長いこと。

等々、実に細かい約束事が書かれているのだそうです。

その中の縷網の相(みずかき)、千輻輪の相(足の裏に千輻輪が掌紋のように現れてい

に弱気になったら負け犬だ。何としてもガンと命をかけた闘いをしなければと思い、ピンチはチャンスだと自分を励まして、死神へ挑戦することにした。

明日の手術は吉と出るか凶と出るか。疫病神よドンと来い。

—— 終わり ——

る)、それがこの写真です。

縷網の相は、京都蟹満寺の釈迦如来の「手」で、千輻輪の相は、奈良薬師寺の薬師如来の「足」です。

これら三十二相八十随好形は、如来ばかりではなく菩薩の中にもあるものがあります。

× × ×



◇近ごろは雑誌の売れ行きが落ちて、平均して四分の一が出版社に返されるという。以前に六百万部も売れた週刊誌があったそうだが、国民の二十人に一人が買ったことになる。オソロシイ? としか言いようがない。

◇先月、古平町文化祭があり、人も多く集まるだろうと七百部印刷したら余ってしまった。どうもこちらでも売れ行きが落ちたらしい。一月号は十二ページに増やし挽回したい。

◇身近かなものの中から、もつと興味のある話題を掘り起こすことだ。いろいろお話をお聞きして、それらも紹介したいのだが——今はこれしかない。

断章小説「ふるさと遙か」 第17編

チコと兵隊

吉川 義雄

小猿をポケットに入れて生還して来たその男は、無口で静かな兵であった。

南方激戦の幾つかの拠点から生き残りの兵員を収容して、イ号潜水艦は懸命に輸送していた。この基地にも、それら敗残の兵たちが来始めていた。ときには昔の仲間もその中にいて、互いに歓声をあげて抱き合った。

言葉を忘れたのかと思う程、一日中黙りこくっているその兵は、支給された軍服に階級を示す何も無いから、基地の下士官ですら警戒して言葉を改めた。

彼の軍服のポケットには二十センチにも満たない子猿が住んでいて、臆病そうに頭だけ出して、他の者が近づくともぐり込んですぐに隠れた。

こんな子猿が棲息する地域と

いえば、南方のジャングル地帯であり、次々に全滅の憂き目にあつていた戦場である。

彼がどんな経過をたどつて、ここまで生きて帰つて来たかは知らないが、想像を絶する苦痛を味わつてきたことだけは間違いない。そんな中でも、彼がこの子猿を離さずここまで連れて来た愛情と強靱な反骨の意志を感じ、兵たちはみんな彼と子猿に好意を寄せ合つた。

所属が決まらないから、終日、兵舎の壁に寄り、悲しげな目を窓外に向けている主人にかわり、兵たちは子猿の好みそうな餌を集めてきた。子猿の方も次第に兵たちを覚え、素直にバナナやマンゴーを受け取つて喰べ始めた。

このころになると主人の彼も、「ありがとう。チコよかつ

たなア」と、心を開いてきた。子猿の名がチコとわかつたときから、兵たちはその名を連発して主人以上に可愛がつた。チコもときどき主人のポケットから出て、顔なじみの兵の傍まで来るが、見知らぬ者が手をのべると飛鳥の早さで主人のポケットに戻つて隠れた。

密林をなぎ倒すような艦砲の炸裂と、追い討ちをかけるナパーム爆弾の紅蓮の炎で、さっきまでの青嵐の森も村落も、基地などは跡形もなく消えた。

百を数えた隊員も、生存者は、彼、杉山兵曹と十人にも満たない兵だけであつた。燃えるジャングルの中で、無我夢中でポケットに救いあげたのがチコであつた。以来、彼等は分身のように離れることはなかつた。

部下を全部失つた彼の心の痛手も大きかつた。チコだけが彼の友であり、チコもまた、彼から離れて行く気配はみじんもなかつた。互いに何を食べるのか分からぬから、チコがカタツムリを彼にすすめたり、彼がチ

コに川蟹をやつてチコがおこつたりした。

沖合いの潜水艦に収容されるとき、数百メートル泳がなければならなかつた。チコは彼の頭の上で、不安そうにキツキツと幾度もないたが離れることはなかつた。

艦上の下士官が、「貴様ッ猿を連れて来てッ」と咎めたが、「黙れッ」と、彼のえぐるような一喝にあつて、以後、誰も文句を言う者はいなかつた。

杉山のふるさとは、冬が来ればキーと悲しげなキシむ音を連れて来る、オホーツクの漁村であり、チコの生まれ育つた密林は炎熱のむせかえる南国である。互いに故郷は遠かつた。

悲しみを知り、悲しみを分かち合つた者であれば、この先も離れることはないだろう。

戦争とは、如何なる理由をつけようとも、一切の幸福を剥離して止まない最大の罪悪である。その愚行に背を向けるようにして、チコと兵は寡黙であつた。

(この稿終わり)

短歌

古平町岬短歌会

幼な日の鯉場の記憶甦る故高野名氏の日記読むに

池田 テル

法話終へて帰る夜道にあかあかと点る螢光灯に羽虫むらがる

竹内 コト

大きな雲覆ふと見るに光射し晩秋の空は変化の早し

榊 佳代

夢かともうつつかとも佇つ美しき光りをて火の玉は消ゆ

鈴木 時子

夏菊を求めて植ゑたはずなのに晩秋に稟として白菊咲けり

田中 香苗

きみの文^{ふみ}今日は来る筈と配達のパイクの音に耳澄ましを

奥山 きよみ

早朝の河口に浸りて鮭を釣る人らとりどりのヤッケをま

東 美知

寒き風背に歩を急ぐ坂の道あまたのもみち葉からからま

丹後 初江

参道に散り敷く落ち葉黄に朱にはなやかなれば踏み行く

山口 スエ

俳句

古平ホトトギス会

街路樹の枝打ち下ろし冬に入る 斉藤波留

墓参道滝野にモアイ並び立つ 山口悦子

虹の輪の中に三村まともれる 越野敏雄

秋鯖をへて帰宅の家族待つ 大和田絵伊

冬構い裸にされし並木道 福井幸平

雪囲い植木の形丸められ 関口勝志

炬ばなしの言つてよいこと悪いこと よしざきり

稲妻や一瞬吾れを忘れさせ 仲谷比呂古

神威岬光る紅葉の先は海 越野清治

鯉漬三軒分の夜なべかな 室谷弘子

~~~~~

石井愛子

俳句

吾子わ幼子微笑むわれも若かりき

退院日迎え来る人居るを楽しく

木枯らしと山わ紅葉冬支度